

ひとり

ひとりの

学びが

育つ場所



広島創生イノベーションスクール
第3回全体スクール 授業記録

チームB feel



広島県立広島国泰寺高等学校



広島県立安古市高等学校



広島県立三次高等学校



広島県立
吉田高等学校



広島大学附属
高等学校



広島県立
広島観音高等学校



広島市立
広島工業高等学校

チームA KFS's



NPO・
大学生
メンター



事務局
スタッフ



広島県立
広島高等学校



広島県立
呉三津田高等学校

広島県立
西条農業高等学校

チームC

チームD レ点

尾道学園
尾道高等学校

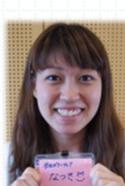
広島県立尾道北高等学校



広島県立
福山明王台高等学校



事務局・ 大学生 スタッフ



第3回全体スクールMission

Mission.03

各エリアチームで決定した「大切な人」や
その人が暮らす「地域」の
「ありたい姿」をイメージして
「解決すべき課題」を設定してください

Mission.04

第3回全体スクールにおいて、
Mission.03で設定した「課題」の解決に向けた
企画案・活動計画を作成します。その準備として、
なぜその課題を解決しないといけないか、課題の解決
に向けて自分が何をするか、解決した状態はどういっ
たものかを考え、各自でレポートにまとめてください。

セブ 300 年構想

国際協力ボランティア団体 「DAREDEMO HERO」

代表 山中 博 氏

講演会では、山中氏のボランティア活動に対する熱い思いを、多くの人を感じたことと思う。山中氏にとってボランティア活動とは何なのか、そのきっかけは何なのか、また山中氏自身で立ち上げた「DAREDEMO HERO」についてまとめていきたい。



山中氏のボランティア観

なぜボランティアをしようと思いついたのか。

30代、ルーティン化した仕事を続けることに疑問を感じ始めた時期に、たまたま訪れたセブ島で、貧困層の大学生と出会う。交流を重ねる中、卒業の時期を迎えた彼らに就職のことを尋ねると「就職できなかった」と笑いながら答えた。家族の期待を背負った兄弟代表が、就職に失敗したとなると笑っていられるような状態ではないはずなのになぜか。「自分が悲しい表情をしたら、周りのみんなも悲しい表情になってしまう。その顔を見るのが自分は何より悲しい」からであった。この考え方の根本にはキリスト教の「**汝、隣人を愛せ**」という教えから来ているようだ。その考え方に共鳴した山中氏は、自分の悩みを吹っ切り、日本で仕事にまい進することが出来た。その後、フィリピンにお返しをしようと、ボランティア活動を始める。

山中氏は「ボランティアとは何か」を長年悩み続けた。

山中氏は「ボランティア」という言葉に常に疑問を持ち続けている。なぜなら、長年の「ボランティア活動」のなかで、たくさんの間違った「ボランティア」を目の当たりにしてきたからである。

「支援とは何か」を考え始めた

山中氏が自身のボランティア団体を設立するまでに、たくさんの団体を視察し、寄付金での支援を行ってきた。そんな中、自分の寄付金で子供たちの何が変わったのだろうと様子を見に行くと、以前と同じ服をきつそうに着ている子供の姿があった。「おかしいじゃないか」「このままじゃ何も変わらない」と考え始めた。自身で立ち上げた「DAREDEMO HERO」には、子供たちは「一番おしゃれな格好をして来る」というルールがある。見た目からでは絶対に貧困層に見えない。それはなぜか。支援をした結果、子供たちが変化したのだ。つまり、子供たちがいつまでたっても変わらない、汚い服を身に付けている、ということは支援が出来ていないことを意味するのではないか。

山中氏は支援するということは変化することと考えている。これこそが山中氏の持つボランティア観であろう。

ボランティア団体「DAREDEMO HERO」とは

山中氏の思い

フィリピンは貧富の差が激しく、そこには簡単には解決できない深い闇がある。これに対して「貧困層から国家の代表が出ればよいのではないだろうか」と山中氏は考えた。そしてたどり着いた答えが「**300年後に貧困層から大統領を生み出す!**」というコンセプトだ。貧困層は、日々不満を抱えながら生きている。しかし行動に移すことが出来ない。なぜなら「リーダー」がいないからである。山中氏はその「リーダー」の人材育成に努めている。



ではどうやっているのか。

DAREDEMO HERO の子供たちの通う公立小学校は在籍生徒数が5,000人にのぼる。授業料は無料だが、学用品や制服をそろえるためにお金がかかるため、学校に通えない子供たちが出てきてしまう。だがそんな貧困層の中でも学校に通わせたいという親の理解があり、勉強意欲がある子供を、山中氏は支援している。平日は毎日無料で昼食を提供し、放課後は「HERO'S HOUSE」で宿題の支援をしている。週末は特別授業で道德・英語・パソコン、そして日本語を教えている。今まで貧困が故に全てを諦めていた子供たちが、同級生が誰も話すことのできない日本語を学ぶことにより、自信を付け、輝き始めている。ここには**誰でもヒーローになれることを伝えたい**という山中氏の意図が隠されている。

「DAREDEMO HERO」その実績は

当団体を立ち上げてからたった半年で奨、学生のひとりであるザーラが**5000人中第1位**となった。学校のトップに「DAREDEMO HERO」の奨学生が登りつめたのだ。1年で学年トップに**7人**が入った。1年半で、成績以外にもたくさんのコンテストで入賞を果たすようになった。

最後に

「**夢と欲は違う**。利他のために動くことこそが夢である。自己のために動くのは、ただの欲である。自分の掲げる夢をかなえた先に、自分が何を望むかしっかり見据えることが重要である」と、山中氏は私たちに教えてくれた。

Prime Field Asia Limited CEO ARIGATO HOCKEY

代表 坂田 淳二 氏

とにかくやってみよう！

1974年北海道生まれ。日本人初の欧州プロ契約のプロアイスホッケー選手。現在はアスリートメンターとして活躍中。



▲テニスボールを使ったウォーミングアップ

課題：いかに1回転半してテニスボールを次の人に渡すことができるのか？

1. まずはやってみよう。
～作戦会議なしでやってみる。
2. リーダはチームのプレイを見て分析
～作戦会議
3. 改善
4. うまくいったチームから学ぶ
～うまくいく秘訣とは？

生徒達は一生懸命に「いかに早く回るか」を考えていたが、坂田氏のファシリテーションによって、大事なポイントは「早く回るか」ではなく、「ボールを落とさず回す」ことだと気づいていった。つまり「相手が取れるようなボールを投げる＝相手のことを思いやる」ことが大切なのだと気づけた瞬間だった。

また作戦会議の際には、「誰か一人の意見に左右される」ことがよくあるが、そうならないためにも、話し合いの際に「あえて否定する役割」を想定するなどするとよい話し合いができることを学んだ。



▲ミーティングでの成果を倍増しよう

1. 会議の開始時

- 意志決定者を決める。
- 各自が自分の思いを発表
(一人ひとりの会議への参加意欲が高まる)
- 問題定義 (個人の指摘をみんなの問題として捉える)
- 問題に対するリサーチ
- PDCA (Plan-Do-Check-Action) のサイクルをつくるために解決策を立て、本当の現状の問題点を知り、掘り下げる。
(この時には、自分たちのプランだけでは解決しないので、周りからの目を取り入れることが大切である。)

2. 問題の指摘ではなく解決策の提案かリクエストを

「どのようにすれば～ができるだろうか」と投げかけることでみんなで考えることができる (自分ごと化)



3. 発言フォーマット

① 提案する

「～してください、～なぜなら…」のように理由をつけて概要を説明し、それから詳細を述べるようにする。

② 質疑応答, リクエスト

提案の後, 質疑応答を通して理解を深める。また, 提案をよりよいものにするためにリクエストする。

③ 決定, スピーチ

皆の案を基に, 集団決定を行う。決まったことを1分以内でスピーチする。それぞれの提案はポストイットに貼り, 形にして残す。

※雰囲気づくり

たまにはジョークもあり楽しいムード作りをすることが大切。終わりを決めてリズムの良いサイクルを作り出す。

3S「Short: ショート, Simple: シンプル, Straight: ストレート」

4. 最後の確認

① 決まったことは何か確認する。

② フィードバックを行う。

▲ 新しいスポーツをつくる (Plan, Do, Check, Action の実際)

全員参加を前提とした小学生が楽しめる新しいスポーツを考えるという活動をエリアチームごとに行った。

• Plan

例えば, 「つながり鬼」という遊びを基に新しいルールを加え, みんなが楽しめる遊びになるよう工夫したり, ドッジボールとバスケットを掛け合わせた「ドジケット」というスポーツをつくったりした。

• Do

それぞれのチームによる実演

• Check

それぞれの提案に対し, 他のチームから意見をもらう。それらを参考に改善に向けて活発な協議が行われた。

• Action

改善案を実演。どのチームも最初よりグレードアップしたオリジナルのスポーツをつくることができた。



PDCAサイクルの実施方法を, 活動を通して学んだ。

▲ イノベーションを起こすためには

一からイノベーションを考えることは難しいが, 何かと何かを組み合わせたり, 何かを削除する, あるいは入れかえたりすることで, 新しい何かを生み出すことができる。このように既存のものを利用して, イノベーションにつなげることが大切である。

▲ PDCAの実践を

「とにかくやってみる!」「改善の繰り返し!」「PDCAの繰り返し!」が大切だと学んだ。

文責: 広政美里

Day1

各エリアの様子 エリアA

KFS'S

「今回のスクールは今までで1番難しいと思う」という寺田課長の言葉で始まった第3回全体スクール。今回のゴールは各自作成してきたレポートを基に、みんなのイメージをそろえて、ストーリー性のある、今後の活動の企画案を作成すること。

エリアAは今まで、大切にしたい人を「**顔の狭い子供**」としてエリア活動を行ってきました。今回はまず、事前に作成してきたレポートの内容に沿って、**公園系**、**イベント系**、**見守り系**の3つのグループに分かれて、アイデアを出し合うことに。公園のグループには、**子供たちの笑顔ある未来のために公園を活用したい**、と考える生徒たちが集まりました。

公園は子供たちの身近にある遊び場なのに、サッカーも野球もできない。自転車にも乗れない。どうすればよりよい遊び場所になるのか…。様々なデータや写真を分析しながら、考えていきます。



「アンケートを見たら家で遊ぶ子が多いみたい。それでも友達と一緒にになるとボールで遊びたい子が多いよね」
「禁止事項がなくなったら何をしてもいいわけではないけど、**禁止で縛るのもよくないと思う**」

「子供が集まることでコミュニティが生まれる。閉じこもっている子供を外に出す、ということなら町内会を使うのもいいよね」



「67%の人は誘われたことがないから町内会に入っていないみたい」
「誘い方を工夫すれば入ってきてくれるかな？」
「そこで高校生にできることがあるかもね」

話し合いを重ねながら、それぞれの意見をすり合わせていきます。地域とのつながりをつくる手段として「**町内会**」が加わりました。次はプレゼンテーションに向けて、雑誌や新聞からポスター向けの画像を探していきます。講堂の舞台にはたくさんの雑誌が広げられていますが、なかなか理想のものが見つけれられないようです。まだ自分の中で、イメージがぼやけているのかもしれませんが。エリアAが持つ指標である、**つながりレベル**の表をつくることになりました。締め切りの時間はどんどん迫ってきます。まずは一度、トライしてみることに。



つながりレベルをあげることを目標に、自分たちはどのようなことに取り組んでいきたいのか。企画案を枠組みに沿って埋めていく中で、企画案の輪郭は徐々にくっきりしたものになっていきました。しかし、プレゼンを聞いた事務局スタッフからは、まだまだ**プロジェクトらしさがなく、ひとりひとりの中に落ちていない部分があるように感じる**との指摘がありました。残念ながら、目標だった企画案の承認が下りないまま、タイムリミットの8時を迎えてしまいます。時間内にプレゼンが完成し、承認を得たグループはひとつもありませんでした。「月間レポートも全然出せてないよね。それって…いいんですか？」カトケンさんの言葉に静まり返る講堂。有識者に対してのプレゼンは明後日。さて、どうなる？

まずは、昨日3グループに分かれて作成した企画案の共有から始めます。

公園グループ

「つながりレベル2
以上の地域を
目指して」

- ネット、地図を活用し、公園の存在を知ってもらう
- 保護者が安心して子供を公園に送り出せる仕組みづくり
- 町内会などのイベントの活性化

見守りグループ

「バーチャル
リアリティで
きっかけ作り」

- 地域の街並みをもとに仮想現実の街並みをつくり、アバターを使った交流
- 実在するイベントを告知する掲示板などで現実と落とし込む

イベントグループ

「地域行事の
活性化を通して
つながりを強める」

- 子供たちに友達と遊ぶ楽しさを知ってほしい
- 行事をマップにまとめる
- イベントの時に子供たちが出店する「こども店長」

「バーチャルリアリティでは個人情報の壁があると思う。アバターもいいけど、安全にすればするほど、現実味が消えていく気がする」

「高校生にお祭りを任せてくれる自治体はあるかな？」

今日のゴールはそれぞれのグループの企画案をひとつにまとめること。シェアした各グループの企画案に、疑問や感想をぶつけながら「**エリアAの企画案**」へとまとめていきます。

エリアAでは今まで、「**つながりで生まれる地元愛**」を重視してきました。広島を好きな子が育てば県外への人口流出が止まるのではないかと期待しています。それでも、考えれば考えるほどに、自分たちの企画案は揺らぎます。

「考えれば考えるほど、地元愛っていらぬ気がする。」

「別に困ってるわけじゃないし」

「でも『幸福感』っていう観点から見ると、絶対にあっただほうがいい」

「俺だって自分の地域を嫌いだとは思ってない。それでも、『地元愛をはぐくむ教育』を受けたからといって、地元を出ずに、今の学校に通っていないなんてあるかな？」

「自分の地域のつながりが増えていけばいいと思うけど、だから出ていけなかっていうと、そうじゃない」

「そろそろ企画案シートは仕上げたい。意見をまとめていこう」

昨日とは違い、「**自分なら**」という視点が加わってきました。

司会をしている生徒が、**全体のペースメイクとタイムマネジメント**を行っているようです。高校生たちの成長の速さに、目をみはります。

「便利さじゃなくて『住みたい』地域を目指そう。**つながり充実度No.1の都市にする!**」

「いいね! そのためにはどうしていきたい?」

「町内会の楽しいイベントを企画して、バーチャルの掲示板ではそれを連絡してもらおう。公園を知りやすく、使いやすくするためにマップを作って、イベントも合わせて表示しよう」

どんどんつながっていく各グループの企画。ここから、企画案をさらにより良いものへとするために、小さなアイデアを拾っていきます。

「広告のはしっこにQRコードがついてるとか。スマホをかざすとイベントのことが分かる」

「公園マップは禁止事項とか広さの情報も分かるものもいい」

「お祭りよりも町民運動会の方が昼間だし安全。こども店長はそこでやってみる?」

「協力してくれる町内会を探そう」



Day 3

今日はいよいよプレゼンの日。第3回全体スクールのゴールはすぐそこです。
発表の時間まではエリアごとに、プレゼンを発表する人と聞く人に分かれて、意見を出しながらプレゼンをブラッシュアップしていきます。

「ジェスチャーがもっとあった方がいい」

「全部は言わないにしても、答えられるようにはしておきたいよね」

仲間からのアドバイスを参考に、何度も何度も練習を繰り返します。長いようで、あっという間だった3日間。その集大成を発表します。

『世界に誇れる広島 ～子供と地域のつながりで愛される地元を目指す～』

私たちの究極目標は**世界に誇れる広島**をつくることです。

大切にしたいのは「**顔の狭い、つながりレベルの低い子供たち**」
現状としては、公園が少なかったり、町内会の行事予定を知らなかったり。地域とのつながりはどんどん薄くなってきています。

私たちは「**人と人、人と地域のつながり**」を**世界に誇れるようになりたい**と考えています。高校生が地域行事を盛り上げたり、イベント告知のマップを作ったりといった活動を行うことで、人と地域のつながりを作ることができるのではないか。そして地元を愛する子供たちが増えてほしい。そう期待しています。活動内容としては、**公園やイベントをまとめたマップの作成、それらに表示するイベントの企画・運営**があります。どのように自治体の協力を得ていくか、イベント運営のノウハウはどこで学ぶか、誰がマップ上の情報をまとめるかといった課題はありますが、4月からは町内会の協力を得るところから始めてみたいです。



運営アドバイザーの方からは、「課題発見・解決へのアプローチができており、実現可能性が高い」、
「**地元とつながっていることを誇りたい、というのがすごく良い**」と評価していただいた一方、「**テーマが大きすぎる。もっと絞った方がいい**」
「**既存のものをもっと調べてみて**」とのアドバイスもいただきました。



プレゼン後のリフレクションでは、「**自分たちらしさ**をもっと出していかないといけない」、
「自分たちだけ活性化するのではなく、**隣町とのつながり**も考えていきたい」とコメントしてくれたエリアAの生徒たち。次に会うまでに、それぞれが何をしておくべきかを整理して第3回全体スクールは終了しました。

今回の全体スクールで、高校生たちが踏み出したのは「**広島の未来を変える**」ための大きな第一歩。広島創生イノベーションスクールのセカンドステージが始まります。

エリアA「チームKFS'S」の今後に、乞うご期待！

文責：時盛郁子

各エリアの様子 エリアB

3月24日

15:15~17:00 企画案作成① 19:00~20:30 企画案作成②

エリアBの大切な人は・・・『子供と若者』

*エリアの中で3or4人チームに分かれて話し合いました。

とある3人グループでは、それぞれ第2回全体スクールで出された課題について発表しました。空き家の活用、地域のイベントを通して地域を守る、都市部に住んでいる「子供」のことなど、様々な事例を出し合いました。そして、ポスターを作成したり企画案作成シートを埋めていきました。

「子供ではなく若者の自分たちが身近に感じている問題は？」

「教育格差を感じる。結局学歴社会になる。学歴社会だと就職できず、ニートが増える。家にこもるからコミュニケーション能力が低下する。」

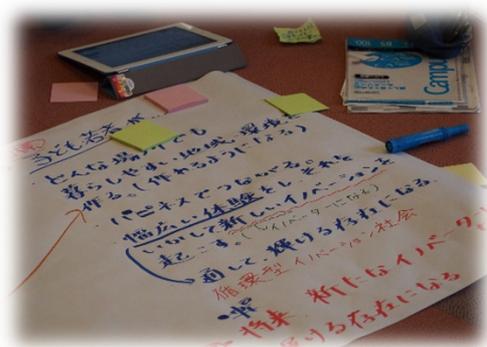
「なんでコミュニケーション不足になってはいけないのか？」

「…持っているものが発揮出来ないとか？」「元気な子供、若者、高齢者がいるのにその人たちが生かされていない。自分たちは『つながり』を大切にしている。」

先生：「**つながり**」に絞れば？

「コンピュータの文字を使わない方がいい。」「**体を使った体験。荒れ地を耕す。0から始める農業体験はどう？DASH村みたいな？**」「楽しそう！」「農業って女子はあんまり興味ないんじゃない？」「PR活動もしたい！平和活動は？」「（PR活動は）何のためにするの？」「続けたいから。仲間を増やす。関心が低い。」

—1日目終了—



3月25日



13:00~17:00 企画案作成③

* 3or4人チームで話し合ったことをそれぞれ発表していく中で『田舎カフェ(校舎内にあり、農業体験も出来るカフェ)』についての話で盛り上がりました。

カフェによる都市部と山間部の交流に対して…先生：「ゴールはどこにある？」

「大切な人と、重きを置いている山間部の活性化とのつながりがいいんじゃないかな？」

「子供と若者よりも、山間部の人に焦点を当てた方がやりやすい。そこを一旦考えた方がいいんじゃないかな…」

*大切な人とは…結局誰なのでしょう？もう一度みんなで見直すことにしました。

大切な人は山間部の人が良いのではないかという意見が多い中で…「プレゼンでは大切な人を山間部の人にする自分たちの言いたいことが伝わる。活動では子供・若者を大切にしたいという思いを自分たちは持つべき。」「やっぱり山間部だけが発展すれば良いって訳じゃない。」

「大切な人は合っているのに、目標がずれている」

*大切な人は子供・若者であることを改めて確認し、現状と目標、そして活動内容について話し合うことにしました。

「地域としての子育てで、子供に幅広い体験をしてもらうこと。」「目標を自分たちがこうありたいというものにしてもいいんじゃない？幅広い体験を通じて、自分たちはこのような人間になりたい、とか。」

「イノベーターがイノベーターをつくる。」「時代に合った暮らしをイノベーターがつくる。」

18:20~20:30 企画案作成④

*具体的な活動内容について話し合う中で、やはりカフェを運営するのが良いのではないか、という意見が出てきました。(会いに行くカフェや、移動式のカフェ、産直市とカフェのコラボなど…)

「カフェにしたら、結局(大切な人が)山間部になっちゃう」

「カフェをイベントとして捉えるのは？田舎フェスとか」「田舎フェスでは都会の子も田舎の子も一緒に。トナカイフェス。」

*トナカイフェスについて考えることにしました。まずはルール決めからです。

「何でも地産地消」「自己責任でやる方が主体的に動ける。」

先生：「趣旨を明確にしよう。絶対的に守るルールを一つ決めたらいいんじゃないかな？」

「趣旨はやっぱり『自分で考え行動する』かな」

「運営は学生・生徒」「企画書を出す人(フェスを運営する人)は若者」「主体者を若者にして、協力してもらう」

*活動内容についての話し合いが盛り上がり、明日に向けて作戦を決めていきました。

—2日目終了—

3月26日

そして運命の…
企画案発表！



発表する生徒たち
だけでなく、
聞く方も緊張している
様子でした。



◎企画案練り直し

*みんなの前での発表が終わり、エリアBのメンバーで反省をし、以下のような意見が出てきました。

- 都会と田舎のつながりを忘れないようにしたい。
- 大切な人とフェスのつながりが分からない。
- （他のエリアの発表を見て）地図や絵を使って可視化するのは良い。私たちは裏付けデータが少ない。また、**ニーズに応える**というのが印象的。
- 時代背景、テーマを常に頭の片隅に置いておくべき**。元気なチームなのは良いが、話を聞く姿勢はよくしないといけない。
- 定義がはっきりしていると言われたことは良かった。しかし**説得力がない**というのは改善すべきだと思った。
- 今回の全体スクールでは**うまくシェアリングが出来なかった**ので、これからエリアスクールなどで女子と男子の意見をシェアしたい。

先生：「企業プレゼンが5月にある予定なので、**みんながやりたいことを語って、協力者を集められるように。このことを考えてやってほしい。何を協力してほしいのか、大きな柱は変わらない。**」

エリアスクールで何をするかについて決めた後、話し合いが終わりました。

～あとがき～

第3回全体スクールで初めて各エリアでのワークショップに張り付くことになり、やり方も分からないために戸惑った部分もありましたが、3日間で生徒たちが形のないものからあるものへ作り上げていく過程を間近で見ることができ、興味深い体験が出来ました。それでもやはり**生徒一人ひとりの声を拾う**ことは難しく、まだまだ生徒たちの言ったことを文字に起こしきれていないのかなと思います。

今回張り付きをして個人的に思ったのは、生徒たちは一人ひとり何かしら「**これは大切だから分かってほしい!**」といった強い信念みたいなものを持っているのだということです。当たり前のことなのですが、生徒たちの話し合いを聞いていると、その子なりに強調したいポイントというものがあって、それはワークショップ中のどんなときにも言葉に表れてくることに気づきました。その一人ひとり個別に持っている信念を、生徒みんなが言葉に表すことができれば、より良いグループワークになるのではないかと、思いました。

文責：有留南実

エリアCの活動報告！！

これまでのエリアC

大切にしたい人：「～したいけど、～できない人」

平和・農業・観光・ものづくりの4分野で活動していた。



✓ エリアCのテーマについて



：エリアの中で分かれすぎている。少ない人数で独立して進めるのは難しい。テーマを絞ろう。

：伝えたい相手が違うから4つの分野に分かれているのではないかな？

：ターゲットが違うから、案をまとめることは難しい。

：個人のやりたいことを優先したい。

- ・観光を軸にして3分野を考える。
- ・観光と平和，農業とものづくりをつなげる。

4分野をどう絞るのか話し合うが、全員が納得できる方法は見つからず…。

・どうして案を絞らないといけないのか分からない。



：これまでやってきたことを完全にやめて決まった案に移れるかと考えると難しい。

話し合いが混迷を深める中、

・ **共通点**を見つけていく。1つのことがいろいろなことにつながっていく。

1つの軸を決めて、これまでグループで学んだことを生かせばいいのではないかな。

この発言から、 **どれかの案を削る⇒軸にする案を1つ決める**

という考え方に変更！



：1人ずつ何をやりたいのか言っていこう。

ここで最も意見が集まったのが、 **平和**

- ・現実味がある。
- ・継続するシステムがよかった。
- ・広島特有。
- ・高校生主体で活動できるところがいい。
- ・他の分野にも結び付きやすいのではないかな。



✓ エリアCのテーマ「平和」について

- ・将来私たちが帰ってきたい故郷（広島）にしたいという目標でどうして平和が必要なのか？



：伝えるサイクルは、「伝えることの大切さ」を知ってもらうため。サイクルに携わりたいと思ってもらえる環境を整えよう。このような地域活性化に貢献することで、地元に戻りたいという思いが生まれる。

- ・ここがしっかりしていないとこれから考えていくうえで難しくなる。



：こんなに簡単に進んでいいのか？

という、不安の声も。その後目標についての話し合い。

- ・結果としてどうなることを望んでいるのか？
- ・当たり前のことへありがたみを感じられるようになること。
- ・平和について生徒が考えること。



：平和を伝えることでどうなるのが大切。

課題設定と活動内容で行き詰まり…



：平和を担当していたのでファシリテーターやります。

ここから流れが**加速**する

- ・活動の面白みが大切だね。
みんなが行きたいと思えるイベントにしよう。



：みんなが参加したくなるイベントはどういうもの？

ここで、続々と案が出てくる。

- ・ツアーは1日では足りない。これではサイクルはつukれない。
- ・ただ、受け取るだけでは何も変わらない。どのように受け取り、何を感じ、考えるかが大切。もっと今後につなげていける活動にするべき。
- ・自分達の町の良さを一緒に考えていける活動にしたい。
ワークショップをしてはどうか？
- ・平和というテーマへのイメージが暗い。もっと明るい印象を持ってもらおう。



3日目

昨日と内容がガラッと変わっていた。メンバーで集まり、徹夜で企画案を作成。

新たな一歩を探す人を・・・～2030年に向けて～

役割のある自分が輝いている社会を創造したい。

目標 いつでも帰ってくる故郷を未来のために。広島特有の良さを未来のために残そう。

大切な人

新たな一歩を探す人→「～したいけど…な人」

背景(現状)

何かしたいという気持ちが満たされていない人がいる。

課題設定

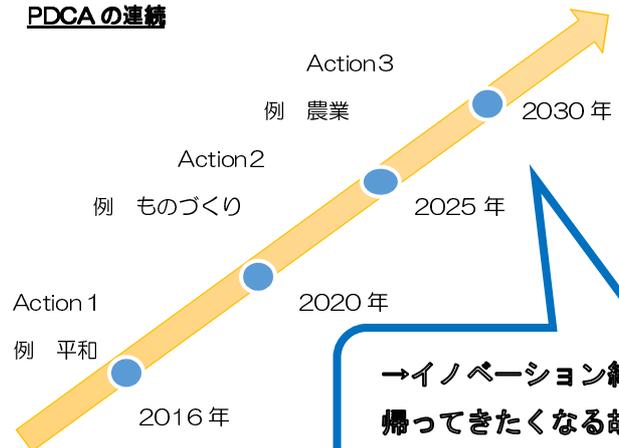
主体的に活動できていない人

目標

アクションプランを 2016～2030 複数回実施

2030年イノベーションを終える

PDCAの連続



→イノベーション終了
帰ってきたくなくなる故郷
の完成

Action 1 平和

大切な人

話し手(聞いてほしいけど聞いてもらえない)

聞き手(聞きたいけど聞く機会がない)

その他(無関心、拒絶)

背景(現状)

被爆者の9割が実相の風化を懸念。平和教育の活発化が急務である。

無関心である、知ったつもりになっている。

目標

持続可能な平和サイクルづくり

全員が話し手・聞き手となりうる環境づくり

課題設定

話し手・聞き手・その他の人の交流の機会がない。

活動

- ① 私たちが語り部の話を聞く。
- ② 自分たちがしっかり理解して語り部として活動を行う。
- ③ 自分たち以外の高校生が語り部団体として活動する。
- ④ 継承者を継続的に輩出する。



今回の全体スクールのワークショップで、実行へ移し、それを分析、改善していくというサイクルを繰り返していくことの重要性に気がつきました。企画の発表に向けて取り組む中で、始めは進まない話し合いへの不安、自分の思いを伝えきれない悔しさがありました。しかし、最後には時間を忘れるほどチームでの企画づくりに没頭していました。3日目の企画発表になんとかたどり着けたのは、有識者の方々に企画を発表するという一つの目標があったこと、2日目の時点でチームのメンバー全員が本気で考えないと何ひとつ伝えられない状況だという現状を認識していたからだと思います。そして誰一人と、議論から逃げなかったからではないでしょうか。

各エリアの様子 エリアD

企画案作成WS

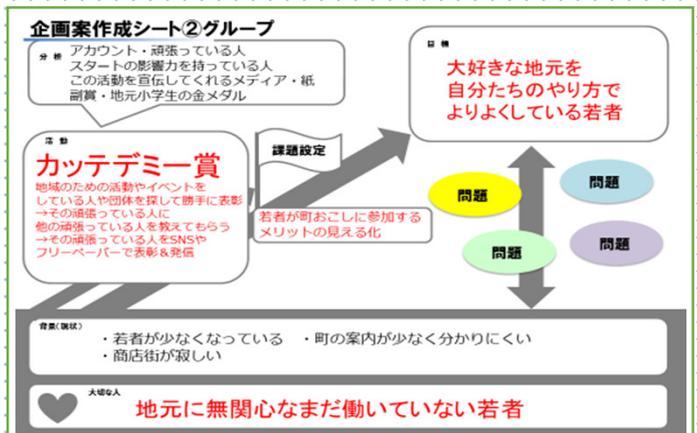
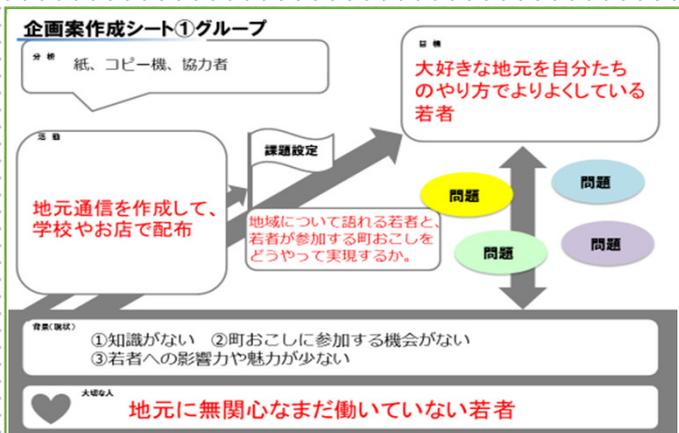
あがるしかないんだよ!

チームし点



day 1

し点のチームの中で2つグループをつくり、グループの中で調べてきたものを発表。課題設定、課題が解決された状況（ありがたい姿）課題を解決する理由（現状）を一枚のポスターで表現する。



事務局の方からの意見

- ・情報誌は作っている人の顔も、情報誌を読む人の顔も見ることが出来ない
- ・もうすでにやっている人もたくさんいるため、地元通信の案は弱い
- ・自分たちは本当にやりたいのか

事務局の方からの意見

- ・若者が町おこしに参加するメリットは何か
- ・本当に若者は減っているのか
- ・地元の人は本当に若者に地元を発展させて欲しいと思っているのか

day 2

グループを統合して意見を共有し、それを合わせて一つの企画に仕上げる

2グループの企画案を見て

- ・2つのグループは似ている点があるので2つは統合しやすい
- ・情報発信の点では一緒
- ・言葉をより具体的にさせる
- ・もっと細かい目標を立てたほうがやりやすい【目標の改革】



『誰が聞いてもそれヤバいって言わせるようなヤバい現状を示すことが大事なのでは?』

→その話を聞いて生徒たちは、現状を表すもの、これなら地元の状況がやばいと思うものをピックアップしようということになりました。

尾道のヤバい状況

- 交通が不便で若者向けの施設がない
- 近くに大きな町がない
- 閉まっている店が多い
- 出生数や若者の人口が少ない
- 今は大昔と比べたら改善途中にある
- トイレ、案内看板、食事処が少ない

福山のヤバい状況

- 若者が帰ってこない
- 公衆トイレがない
- 若者の人口、生産年齢人口も減っている
- 高齢者も減っている



『今まで目指してきたのは一番上の目標である活動してもらうことだが、まずは興味を持ってもらうことから始めたらいいのではないか?』

→この言葉から目標をどこに設定するかで激しい議論になりました。

- ☞ ちゃんと計画を練らないと2年で目標を達成できない
知ってもらうことや興味を持ってもらうことはできそう。
それだけでも十分なのでは?? ☞
 - ☞ このプロジェクトは地域創生である。知ってもらうだけでは変革を起こせないのではないか? ☞
- ☞ 2年でプロジェクトを終えて、ハイ終わり。ではなく継続してもらうためにはその若者達にも広めてもらうことが必要だよな。 ☞
 - ☞ 興味と活動の間にワンクッションを置くような目標をまた作ればいいのではないか? ☞
- ☞ 長期スパンの目標に設定。自分たちが積み重ねていくものは2年で終わらせてはいけない。 ☞



すると、この議論を聞いていたClassiの方がこう助言をくださった。

『①初めから自分たちはできると大きな目標を置くタイプと②自分ができる範囲で目標を達成しようとする堅実タイプの2タイプがいる。目標を立ててその目標を達成したら、その都度見直していくことが重要』

このアドバイスを経て、し点は活動について考え始めました。

地元に興味を持ってもらう 最初の段階の目標

- ☑ **カッテデミー賞**
福山や尾道で頑張っている人を紹介
- ☑ **お出かけプラン**
福山や尾道を知ってもらういい機会に
- ☑ **商店街ルート**
若者が興味を引くようなモノにする

地元に興味を持った若者が活動 するという最終目標

- ☑ **学校をつくる**
尾道自由大学の協力を経て、
地元のお店や商店街を使った授業を展開
- ☑ **イベントづくり**
サイクリング大会などを通して
人とのつながりを作る

そして今回のエリアスクールでは情報発信という点から、カッテデミー賞をメインに発表することになりました。そしてチームし点は最後の修正に取り掛かっています!!!!

day 3

ついに最終企画案が完成!!!そしていよいよ、発表。そしてドキドキの講評。まとめ。

企画案について

企画案作成シート

*** アカウント、頑張っている人、お金、紙(賞状)、副賞、メディア

*** 大好きな地元を自分たちのやり方でよりよくしている若者

課題設定

カッテデミー賞

若者が町おこしに参加するメリットの見える化

問題

問題

問題

問題

背景(現状) 尾道、福山共に若者、人口が減っている。休日にもかかわらず商店街の閉まっている店が多い。若者の地元についての知識がない。町おこしに参加する機会がない。若者にとっての魅力が見えにくい。

大問題 地域に無関心なまだ働いていない若者

Q. 情報発信の媒介は何か?

TwitterやFacebook



Q. この活動のメリットは??

楽しい/自分自身の成長
充実感/達成感
おいしいことしている感
メリットを企画から外さない

Q.カッテデミー賞とは?

勝手にとアカデミー賞を組み合わせさせてネーミングされた。福山や尾道で頑張っている人をユニークな部門ごとに表彰。表彰された人が次の頑張っている人を紹介する。

Q. やって盛り上がらなかったらどうするか?

絶対に成功させる。 そのためには、協力が必要。そこでフィールドワークで出会った尾道自由大学は2000人近くのフォロワーがいる。また尾道で頑張っている事業のFacebookいいね数が11万!そこに協力してもらえたらもっと多くの人に活動を知ってもらえる。

Q. カッテデミー賞の部門とは?

大人がやると、堅苦しくて敷居が高い。そこで**高校生らしい柔らかく面白い部門を提案。** 例えば、ぶち努力しとるでしよう部門や実年齢〇〇部門など。

Q. 表彰したその後の活動

- 年間でいいねをしてくれた人や興味を持ってくれた人をイベントに招待。そこで多くの輪を広げる。
- SNSのいいねの数が多い人に**年間最優秀カッテデミー賞**を送る。それを市長さんに渡してもらう。

Q. カッテデミー賞を通じて

一から事業を作ったりすることは難しい。しかし、既にあるものに一回でも参加することはたやすい。そのためには**活動をしたいと考えている若者の手助け**になればいい。サイクリング大会などのイベントづくりを行う。また、カッテデミー賞を受賞した人が活動できる場所として大学を作る。



チーム視点への講評

- “興味がない人に興味を持ってもらうことが一番難しい。興味があっても動けないという人を最初に動かすほうがたやすい。”
- “印象に残る。”
- “エビデンスをデータで示すのはいい。いいことしているという自己肯定間はgood”

- “レ点が一番良かった!!!”
- “自分たちもこうなったらいいなという気持ちと自分たちの価値観で作られていて良かった。そういう人たちが募って大学を作るという発想は面白かった。”
- “このグループの企画案の根底には、面白さがある。”

まとめ

- 言われてそうだなと思うところがたくさんあった。• とりあえず成果を出すことが大事。
- 他地域と関わることで可能性が広がってくるのであれば、関わってもてほしいと思う。でも私たちがしたいことは地元を元気にすること。まずは地元の人に知ってもらうことが大事。
- 大切な人を見直す点でも福山や他の地域でもアンケートを取ったらどうか?
- 興味が湧いている人がどのくらいいるのか?
- 興味がない人に興味を持たせるのにみんながどうやって一歩を出すか。

文責：田口真帆

チームA KFS's

**「地域との繋がりが薄い子供たち
への支援（広島市域中心）」**

(Web上でのイベントマップ・公園マップの
開設, 高校生による子供たち向けイベントの
開催など)

チームC

**高校生による「平成構築に向
けた活動」の開催**

(被爆の歴史の継承など)

チームB

**高校生による「都会と
田舎の子供・若者を繋
ぐイベント」の開催**

(小学校から高校生たちが幅広
い体験活動ができるイベントの
開催)

チームD レ点

**「『地域に無関心な若者』
の減少に向けた活動」**

(地域活性化に取り組んでいる
若者・団体に対する表彰制度の
創設など)

各チーム企画案決定！



2015-2017

Hiroshima Innovative School

supported by OECD